

本木仁太夫良永の事績

——長崎の阿蘭陀通詞、地動説の我国最初の解説者——

桑木彥雄

一 本木の名の久しく埋没せしこと

杉田玄白の「蘭学事始」（文化十二年）に、

「有徳廟（徳川吉宗）の御時、長崎の阿蘭陀通詞西善三郎、吉雄幸左衛門、今一人何某（名は忘れたり）とかいふ人々申合せて談ぜしは」

とありて、当時、西洋文字の読み書きが禁止されていたため、長崎の世襲の通詞といえども、唯だ片仮名の書留めなどをたよりに、暗記の詞ばかりで通訳していた。前記の三人言い合せて、此の如きは余りに心細き次第である、何とぞ我々ばかりにても、文字を習い、彼国の書をも読むこと免許にもならば、万事につけ御用弁宜しかるべく、彼国人に偽り欺かるる事ありとも糺明のすべもあるうと申立てた。公（吉宗）は至極尤の願筋であるとして速に之を許された。「これぞ阿蘭陀渡来ありて後、百年余にして横文字学ぶ事の始めなり」と記されてある。

「蘭学事始」には、之を青木昆陽が蘭書購読を徳川吉宗より命ぜられたより前の出来事としてあるが、大槻磐水の「蘭学階梯」（天明八年）等に依れば、延享元年既に命を受けて蘭語を学び始めた昆陽が長崎に赴いたとき「訳司西、吉雄等」が昆陽を通じて蘭書を読むことの許可を幕府に願出でたとあり、両書の記す所、順序が逆であるが、今は

後の「階梯」の方の説が通説となつていようである。併し^{しか}近頃又是等の何れとも異りて、本来、通詞には蘭文読み書きの禁はなかつたという井野辺氏、古賀氏等の説もある。とにかく、享保、延享の頃、通詞に人材出で、それまで通詞は単に日常の応対、交易の用を弁じていたのに過ぎなかつたのを、この頃から初めて、読書訳文が緒についたことは明かで、また昆陽が長崎で通詞に面会したことも固^{もと}より疑うべくもないが、そのときの通詞を「階梯」には「西、吉雄等」とし、「事始」には「西、吉雄、今一人何某、名は忘れたり」としてある。この「何某」がここに述べようとする本木仁太夫良永其人であるとする説今は多いのである（「長崎県人物伝」其他）。然し^{しか}ながら昆陽が長崎へ赴いた延享元年（一七四四年）には、西も吉雄も小通詞か或は略^ぼぼ之に近き役についていたが、良永は享保二十年（一七三五年）の生れでこのとき僅に十歳、寛延元年（一七四八年）十四歳で口稽古、翌年父仁太夫良固の跡をついで初めて稽古通詞となつたので、又父在世中に良永の通称は栄之進であつた。父を差^さ措^おいて無役の幼年の栄之進が吉雄等と共に昆陽に遇つたとすべきであらうか。併し^{しか}父良固は享保三年稽古通詞となつた後、役も進まず格別の功績もなくして歿^{しか}したらしく、吉雄、西と同列の通詞には他に榊林姓のものもあり、其名は「蘭学階梯」等にも見えている。併し^{しか}とにかく、当時通詞職に在つたものは是等の数人に限らないのであるが、実際に明和、安永の頃に蘭学を興す功があつたのは、吉雄、西と共に本木良永であつた。然し^{しか}ながら三人の中でも本木の名は従来不思議に閑却されていた。本木の家は通詞として初代庄太夫栄久、二代仁太夫良固、三代仁太夫良永、四代庄左衛門正栄、五代昌左衛門久善、六代昌造久通に至り、五代六代は明治初年に歿した。その中、六代昌造は我国活版印刷術の鼻祖であり、嘉永年間既に此事業に着目し、遂に現在の東京築地活版製造所の最初の経営者となつたので、人の記憶に残れるものもあるが、三代四代の畢生の事業の如きは、郷土の長崎に於てさえ、忘れられたままに危く堙滅し終ろうとしたのであつた。明治四十四年に長崎市小学校職員会で発行された三四百頁の長崎郷土誌の人物伝にも本木昌造の他には本木の名を全く欠いていた。それが恰^{あた}も其年の秋に、この「郷土誌」の著者北野孝治氏が、昌

造の事績について更に研究するため、本木家の故旧某女移転の際発見したという故反古入れの葛籠を搜索して、偶然其中から、本木家の系図、古文書、仁太夫、庄左衛門の遺訳等三四十巻を探し出され、ここに初めてこれらの本木家祖先の事績が世に表わるるに至ったのである。(北野氏のこの発見の顛末は明治四十五年六月の長崎市高等学校勝山同窓会誌に掲載されてある。)斯くして長崎市大光寺に良永の墓も見出され、良永の友人榊林栄哲の撰した墓碑銘に依りて、その伝記も明かにせられるに至った。大正八年長崎県教育会発行の「長崎県人物伝」には、本木仁太夫を語学者として又天文地理の蘭書の最初の翻訳者として特筆し、墓碑銘を掲載してある。

二 本木の訳書九種の解題

発見された良永の訳書は十二三種あり、今長崎市役所に保管されてある。皆、安永、寛政年間に成ったもので、長崎奉行の命により、即ち幕府の命により又は平戸松浦侯の囑に依りて翻訳したものの草稿又は控である。正本は獻ぜられて他に在るものと思われ、これらの発見された諸冊子には訂正の箇所、未完成の箇所など数多見られるが、図板等は極めて緻密に写されてある。其中天文地理に関するは次の九種である。夫等を年代順に挙げれば、

(1) 阿蘭陀地球図説 (安永元年、一七七二年)

本木良永訳、松村元綱校とあり、三巻に分れ、第二巻の終に「安永元年壬辰季冬吉日」とある。原書の名は知るを得ぬが、一七四五年出版のものであること書中に記されてある。総紙数六十枚許り。内容を摘記すれば、地球全体を兩半球(原本「半円」とあり)に分ちて図すること。亜墨利加^{アメリカ}発見のこと。(その中に、ホルコ、プラ^{それ}ンティンギを夫々人及植と訳し、「人民蕃育術ト云ハンガ如シ」とある。以下、外国文字の読方、訳等皆本木訳文の俛に従い唯だ^{カナ}仮名のみを記して漢字の当字を略する。又拗音キュといふ如きを訳文には現在の普通のと逆にユを大にキを小さく書いてある。ここでは必ずしも大小の別を保存しない。)デーメンの地、新阿蘭陀のこと、地球

の周行をワーレ、ベウエーギンギとし実動と訳し、日曜、日輪の周行をシケインバーレ、ベウエーギンギとし、顯動と訳し（後に志筑柳圃は之を「視動」と訳した）その説明、ラテイン語ソーデイヤク、蘭語デイル、キリンギ、獸輪十二分の名を漢訳と対照、経度緯度のこと、各国里法、赤道線並に平行線に当る東西一周里数算法、全地球長日長夜短日短夜の算法、四方四風三十二向のこと、地球半分のこと（国の見開き、人民蕃育、国産のこと）、極、極星のこと。改曆前六百年ミレーテンのターレスが極星測量航海に長けたるへニシーン人より学び、日月周行を考え、食を推算したこと、ターレスの弟子アナクシマンデルも此学道に進んだこと、アレキサンデル、デ、ゴロートのこと、セーザルのこと、ユーリウス歳算のこと、プトロミユースのこと、コペルニキユスのこと、テイコ、ブラへのこと、羅針盤のことなど。

以上の題目について、固より翻訳ではあるが、当時の我国の書物としては驚くべく精細に叙述してあり、又特に注意すべきは、この安永元年の訳書に既にコペルニクス等について記してあることである。

(2) 平天儀用法（上巻安永二年中春、下巻同年季春）

「和蘭^{オランダ}ヘーメルス、プレインの用法」と記し、又和蘭府天文学士ホークト著とある。平天儀の名は古くから用いられている。本書には和蘭曆法の大要、西洋一日二十四時と日本一日十二刻との比較、十二宮（舎）の訳名、太陽諸星昇降南中等の時分の解説等を記してある。

(3) 天地二球用法（安永三年秋）

本木良永訳、松村元綱校とある。良永の記せる序は「天地二球ハ天文地理ノ学士及航海者ノ要器ナリ、或人一日予ニ此器ノ用法ヲ問フ、予謂、之ヲ明スコト容易ナラス、予カ得ル所ノ一書アリ」とて一六六六年アムステルダム出版の書を訳したもの、安永三年即一七七四年まで百八年を経と断わつてある。又「此書ヲ解ルニ和漢ノ文則ニ拘^{かかわ}ラズ専ラ和蘭ノ意ニ従ヒ、正訳或ハ義訳、仮借略文ヲ交ユ、然^{しか}ラザレバ彼土ノ語意ヲ解シ難シ、彼ト我ト語路同ジ

カラザレバナリ、此二予ガ同学ノ友人松君紀ニ漢訳ノ名議ヲ問ヒ且字句ノ校訂ヲ請ヒ」云々。

松村元綱、字君紀、号翠崖、和蘭陀舌人と三浦梅園の臨山録に在る。

(4) 太陽距離曆解 (安永三年)

未見なれど、本木の他の書にデクリナーシヨン距離と訳してある。

(5) 日月時圭和解 (安永五年十一月)

同綴の「十二舎日月圭解」には天明七年の春とあり、皆、平戸侯の囑に依り、その蔵する日時計、月影時計の説明、其符号の解釈を記したるもの。「此器日圭の遊表ノ図ヲ以テ考フルニ、此表ハ三十六度四十五分程ノ北極出地ノ国土ニ用ユベキ遊表ト見ユ、今此器ヲ日本国ニ用ヒレバ北極出地ノ不同ニ因テ日影時点ニ下ルコト正時ニ少ク違ヒアラン、願クバ貴国(平戸をいう)ニ於テ天学士ニ命セラレ北極出地ノ高低ヲ定メ遊表ヲ正整アラバ、正時本天ト均ク庶幾クハ測量違ハザラン云々。」

(6) 和蘭陀海鏡書 (安永十年三月)

航海術の書、吉雄耕牛が本書について、「此書平戸已来、通詞中心を掛け候へとも一下り二下りは筆を染候へども、中々不学のもの、及ぶ所にあらず。然るに良永子此度全備致させ、永く訳士の重宝に相成事誠に難有き事なり。恐らくは此末如斯なる人出来候べしと思はれず。依て此書ありがたく見給ふべし。天明八年、吉雄永章」という手書、長崎福田忠昭氏所蔵に在る。吉雄幸左衛門又幸作、永章、耕牛は夫々通称、字及号で、この手書、耕牛が何のために記せしか明かならねど、良永が訳司中いかに傑出したかを知るに足りる。

(7) 阿蘭陀永続曆和解 (天明八年十二月吉雄幸作、本来仁太夫)

吉雄、本木の共訳である。エーウイギ、デユーレンデ、アルマナツクの訳とあり、又「右は曆面横文字の大抵、並に今年出島在館の阿蘭陀人ピイテル、テヲドリース、サスセと云へる者の教と阿蘭陀曆学書の文面を加へて翻訳す」

とある。数個の円形の遊表を廻わして、暦日を繰り、朔望を知る等のものの説明である。天明八年を例として算出を示してあるものを、傍註に、寛政五年に換算してある。

(8) 万国地図書和解(寛政元年、一七八九年)

「長崎通詞由緒書」に、「寛政元酉年万国地図書式冊和解被仰付為御褒美白銀五枚頂戴仕」とある。「永続暦和解」も同様。

(9) 太陽窮理了解説上下二卷(寛政四年)

この書も官命により翻訳したもの、時に良永年五十八。「先生著訳中最難の書」、「先生必死の著」と伝えられている。墓碑銘に、「嘗て命を奉じて書を訳す、時維れ嚴冬、自ら冷水を裸体に灌ぎ、素跣して諏訪神廟に訪で、其業を卒るを祈る。人或は諫めて曰く、子既に老たり、何ぞ自ら苦むるの劇しき、君曰く、吾れ先世より訳を以て公緑を食む、蓋し其職を尽して斯を以て死に至らば、即ち吾が分のみと、その勤学刻苦率ね此の如し」(原漢文)とある。或は本書の訳について云うか。遂に病を得た。碑銘に、「その病むの日に当つて、尚ほ蘭書を左右にし、手巻を繹せず、是故に益其神を勞するも、毫も自愛する所なくして起たざるに至る」とある。寛政六年病歿せられた。

「太陽窮理了解説」原書名ゴロンデン、デル、スタルレン、キュンデ云々、「星術本原太陽窮理新制了解天地二球用記」とも訳してある。著者、年代等不明であるが、書中所載に依れば、英書の蘭訳で、蘭訳者註を附して、原書の誤謬を正し、尚「ラ、ンデの星術測量云云」の語あるにより、当時に余り古きものでないことはわかる。訳本、上巻はその本文で、太陽系諸惑星の運行の諸要素、月の盈虚、日月の蝕、大気屈折による視差等について記し、下巻は「和解例言」と題する。上巻本文の「章」の数足らず、或は上中下三巻の中、中巻が散逸せるものか。「和解例言」には先ず和蘭各種文字(印符文字、板行文字、書牘文字、算数文字、算数文字別形)を挙げ、各文字と発音、一個二個三個づつ文字を組合せたものの発音の組織的な詳しき表、片仮名のみを以て音韻を十分に示すことができ

ないとして漢字を当て唐音を以て示すため、唐通事石崎次郎左衛門に唐音を学んだことが記してある。蘭語を日本語に翻訳することの困難について述べた中に、「総シテ和蘭言語ヲ翻訳シ左行ノ横文字ヲ以テ日本右行文字ノ縦に訳ヲトルハ鳥獸草木ヲ以テ人事ニ当ツルニ同ジ、蓋シ人ハ天地ノ豎氣ヲ受ケテ万事ニ通達ス、鳥獸ハ天地ノ横氣ヲ受ケテ頭横ニ附テ横ニ歩行シ、草木ハ天地ノ逆氣ヲ受ケテ逆ニ立チ、ソノ口ハ地中ニ在リテ根ニ培養ス、左行横文字ノ言語ヲ日本文字ノ縦ニ解スル、訳言的当スベカラザルナリ、之二依テ先輩ノ訳人和蘭ノ書籍ヲ翻訳スルモノナシ、和蘭書ヲ解スル憚ル所ナシト雖、天学書ヲ解スルハ天神地祇ノ恐れアリ、先師先輩ノ許サザル所ニシテ憚アリト雖、今鎮台ノ命ヲ奉ジテ此書ヲ解スルハ辞スベカザル所ナリ」(原文を稍短縮)とある。次で日蘭曆の比較、太陽曆と太陰曆とのこと、和蘭の正月のこと、地球中心説と太陽中心説との古学新学の別あること、和漢の天学に命理、形氣の別ある如く、星占いの術と測量推歩の星行術との別あること、又「ヒロソヒセ、フォンデルウエイセル」、其名を訳すれば和語に儒教と通ずるなりとあり、又智学といふ訳も記しあり、コペルニキユス、ケプレル、ガリレイ、デスカルテス、ガスセンデユス、ニウトン(称呼原文の俚)の名を挙げ、「窮理学及ビ性理学ノ基ノ動力ザル所ヲ極メ」とある。テイコ、ブラへの折衷説を記し、「此説ヲ取ル者寡ク、専ラ義理ノ趣キアルこべるにきゆうすノ太陽窮理ノ学ヲ実説トナス」とある。

以上列記せる諸訳書の外、良永には阿蘭陀本草、佐亜列布之説の稿があり、碑銘に、「天文地理医療物産に至つて研究洞通を尽さざるなし」とあるが、その量に於て見るも、天文地理に最も力を致したので、その中「太陽窮理了解説」は最後の作であるだけ、訳語、用語も安定し来つたように見える。又、「和解例書」を附したるなど、和蘭語の一般的即学術的研究に一步を入れたというべく、発音に於て先ず之を完うして、後の志筑柳圃の文典の研究に先駆となっているとすべきであろう。

訳語、訳文の例を若干挙げて略ぼ本木の訳書の体裁を示すべきが、先ず当時和漢に天学と称するは和蘭に星術と

いうとあり、書中、天学語にて何、和蘭語にて何ということ、一々記してあり、又「天学語と記すはラティン語、フランス語、アンゼリヤ語、ギリシヤ語、ゼルマニア語、イタリア語、アラビヤ語、インデヤ語、ジャワ語等、和蘭陀語と記するは、和蘭陀人平日俗談通用の語」としてある。例えば、

「プラネーテンといふはラティン天学語なり、此語和蘭にドワールステルと通ず、此に惑星(まどひぼし)と訳す、……今此所に在るかと思れば彼所に在りて天学者推歩測量をなすに纏度に迷ひ惑へるに因る」

とある。支那では日月及五星を緯星と云い、恒星を経星と云うに對せしめた。ホープト及ミンデレ、プラネーテンを夫々大惑星、小惑星と名け、ミンデレ又は、ベイというに依り、副惑星とも訳し、ワクテルス、タラワントン、サテルリイテンを直人星(又番人星)、直宿星、侍衛星などとも訳した。オルビスを「永続曆」には「天」と訳し、火星天、土星天等、九重天説の「天」字を用いてあるが、本書には「歩行行環」又は「行環」としてある。エロンガーションを広がりとして訳し、又「太陽の平面(おもて)を截る惑星の渡り」などの語がある。天学語エックセンテイリシタス(和蘭語オイトミツデンヒユンテイキヘト出中之中点)と訳してある。今云う「位置」を「在位」、「切線」を「当線」(あたりすじ)と記し、又「三隅」という字を「三角」又は「角度」の意に用いてある。

書名の「太陽窮理」というは「ゾンネン、ステルセル」の訳という。Stengelはシステムで、今吾人は之を「太陽系」と訳する。「大惑星小惑星彗星等と共に無量数多の球円の形象相集まりたる天を名けて和蘭語ヘール、アルといふ。ヘールとは広大に全き意、「アル」とは悉く皆といふ意を云う語なり、恰も広大に全き悉皆の天と云はんが如し、和蘭人之を「ワレルト、ステルセル」と名く、此語世界の窮理と云はんが如し」とあり、又「コペルニカアンセ、ステルセルと云ふは太陽窮理と云ふに同じ、コペルニキユスと云ひし人の窮理学と云ふが如し」とある。「永続曆」にシステマア、コペルニキユム、システマア、プトレマイキユムをコペルニキユスの学、プトロミユースの学と訳してある。ステルセルとシステマアと同一なことを認めたことはわかる。訳文の一例を挙げれば

「光明斜ニ中ヲ通り貫ルニ其光明ハ直ニ通ラズシテ中心ニ曲レルナリ其曲レル所ヲ名ケテ天学語「レフラクシイ」ト云ヒ和蘭語「スタラール、ボイギンギ」ト云フナリ此ニ光明ノ曲リト正訳シ、又游氣ノ視差ト義訳ス。」ここで「光明」は「光線」、「直ニ」は「マツスグニ」と読むべきであろう。

三 本木の生涯及び其の時代

諱良永、通称栄之進、後仁太夫と改む、字士清、号蘭臯、享保二十年（一七三五年）六月二十一日生（碑銘）。寛延元年口稽古、同二年父仁太夫跡職被仰付、稽古通詞罷成、明和三年小通詞末席、安永六年小通詞並、天明二年小通詞助役、同七年小通詞、御扶持方三人扶持被下置、同八年大通詞、五人扶持、寛政六年病氣に付、御暇奉願、願之通被仰付、且老衰候迄出精相勤、其上蛮学、心掛宜、格別御用弁にも相成候に付、為御褒美白銀拾枚被下置、同年七月十七日病死（由緒書）、年六十。又碑銘に、「君人となり質直、奉公無私、儉にして華飾を好まず、終身絹布を用ひず」とある。又旅行も少かつたようである。由緒書には唯、「寛政三年小倉領藍島沖へ異国船漂流ノ由注進アリ、見届ケ被仰付、彼地へ罷越候処、帆影相見エ申サス、領主役方へ様子相糺シ候上帰郷仕リ」とあり、このこと碑文にも見える。斯様の見分は一般に通詞の役目で、良永の格別の御用弁というは和蘭天文地理書の和解に在った。先きに良永と並記した西善三郎、吉雄幸左衛門の二通詞の中、西は享保十八年口稽古、元文元年稽古通詞、同四年小通詞末席（此時父善右衛門も同じく小通詞末席、父子同役、別株）、延享三年父跡職（別株は弟相続）、同四年小通詞、宝暦三年大通詞助役、同四年大通詞、明和五年病死（由緒書）、年五十一。西がマーリンの和蘭字書を写し取った熱心、又蘭和对訳字書を我国に初めて企てたことは「事始」「階梯」等にも見えるが、業半ばにして歿した。前野良沢が明和七年長崎に来たときには西は既に故人で、吉雄と本木とのみ会したのであった。

吉雄幸左衛門又耕牛は良永に十一歳を長じ、延享元年昆陽に会したとき二十一歳、寛政十二年七十七歳で歿した。

蘭人附添で屢々江戸にも出で交遊もひろく、長崎通詞中の先達として知られていたようである。通詞としての外、医術に於ても表われ、著訳書若干、吉雄流外科を称せられるに至った。蘭学及医学に於て良沢、玄白等も師事したことあり、かの解体新書に耕牛の序を請うてある。三浦梅園も長崎に遊んで、吉雄について泰西の異風奇器に關して聞いたこと、その帰山録に在る。天明五年大槻磐水が長崎に赴いたときには、磐水二十八歳、本木五十一歳、吉雄六十二歳、磐水の所記に「余長崎に遊学し、本木蘭臯の家を主とし、西書の訳法を受け、又時々吉雄家の塾に入す」とあるという（大槻家所蔵吉雄耕牛伝）。

通詞の本業以外に、吉雄が医術に、本木が天文地理に志したこと、固より往時南蛮人渡来以来これらの術が長崎に伝えられたからで、天文は林吉左衛門・小林謙貞以後、西川如見・北島見信の影響を受け、本木も、航海術・曆法等の実用的の研究より始めて、所謂窮理・性理に及んだものと思われる。併し本木が天文書を読んだ外に、自ら実測をなしたことは、伝えられていない。柳圃にはオクタント用法などの著訳があるが、良永には「テレスコープといふ遠鏡にて見れば」などとあるのみで、主ら訳書訳文にのみ尽したようである。又算数の学力に就ては如見も十分でなかったことを伝えられているが、良永も亦アラビヤ数字を書き、又楢円・焼点（原文の俣）其他幾何図法を用いているが、書中記す「算盤」、「算計」の詳細は訳書中には見えていない。元来が命を奉じたる和解であり筆者の心の俣の著訳と異なり、これらの書物のみで凡てをいうことはできないが、天文書を読むも、文字の意義を知るに忙しく、所謂推歩測量には及ばなかつたと思われる。それは自ら他の天文方の役目であった。元来、徳川吉宗が蘭書講読の端を啓いたこと、彼れが天文学を愛好したのに基き、然かも吉宗はその結果を見ないで薨じたが、後の將軍も天文地理の攻究の忽がせにすべからざるを認め、和蘭天文書曆書地理書を得るままに本木をして其和解を上らしめ、本木は殆ど是等の和解の専門家たらしめられたのである。然るに既記のようにそれらの訳書は明治四十四年その甚だしく蝕んだ草稿及控が発見せられるまでは、今人には全く其存在を知られなかつたが、それが同時に

及ぼした影響については若干を記載することができる。

既記のように、本木は、安永元年より寛政四年に亘つてコペルニクスに基いた天文説を訳述しつつあったが、安永五年に浪華^{なむわ}で出版された当時の有名な天学者西村遠里の天学指要四冊は、やはり天官書等の支那在来のに加えて、天経或問等に基く西域の説即ち南蛮の天文説・九重天説・天動説を説明したものに過ぎなかった。青木昆陽を宗とした前野良沢・杉田玄白・大槻磐水其他の蘭学創始者は概ね医師出身であり、蘭法医学の研究を主としていたが、その中、前野良沢は研究範囲も広く、著書目録中には天文に関するものもあり、力学に関して記したものもあるが、固^{もと}より当時にはひろく伝わったものではなかった。ひとり、磐水社中の一人ともなつた司馬江漢は寛政より文化文政の間に、地球図・天球図・その図説・和蘭天説・刻白爾^{コッペル}天文図解等を出版し、又その随筆、春波櫻筆記に見るに、地動説の説明に諸侯に招かれたなど、当時に高名であつたことが知られる。文化五年版の刻白爾天文図解の凡例に、「此編ノ全説ハ西洋ノ書ニシテ、サキニ崎陽ノ訳詞本木氏翻訳スル者ニシテ、余請フテ之ヲ閱ミスルニ刻白爾ノ窮理、地転ノ説ナリ、悉ク符号ノ文字ヲ以テ図解スト雖、甚ダ解得シ難シ爰^{こゝ}ニ於テ積年空シク勞ス、頃口其原本ヲ得テ稍片端^{やや}ヲ披^{ひら}ケリ、然レドモ天儀ヲ製造シ以テ天度ヲ測量セサレハ了解シタリトハ云ヒ難シ、故ニ啻^{ただ}地転ノ窮理、地転儀略図解ヲ造製シテ日月五星ノ高低ヲ図シ、此説ヲ疑フ者ノ為ニス」

又、

「天文ヲ躰カニシ曆ヲ算スルハ西洋ノ人航海ノ要術ニシテ、大地ヲ一周廻セザレバ度法ヲ知ルコト能ハズ、是レ支那日本ノ人知ラザル所以^{ゆゑん}ナリ、今吾東方蘭学ヲ開ク者数人、予ヒソカニ其門ヲ窺ヒ、遂^{すこぶ}ニ頗ル此意趣ヲ知レリ、爰^{こゝ}ニ於テ社中翻訳スル所ヲ請テ天説ヲ著ハス……今亦地転ノ説ヲ図解ス……」

とある。訳語等本木に従っているものが多い。併し^{しか}本木には天文及曆を越えて、物理氣象については僅に磁氣及羅針盤に関するもの位であるが、江漢のは夫等^{それら}の記載に豊富である。「天経或問」も氣象等について記し、寛政十年の

志筑の「曆象新書」も天文以外物理に涉つた。併し江漢のは翻訳でなくして、著述であるが故に、当時の事情に考えて当然と思われるが、本木や志筑の訳書に比べて記述が粗漫であることを免れない。蘭語の読み方にも誤り多く、又外国の地理風俗を記すにも山海經式の誇大も見え、本木の訳書の平板、緻密なるに及ばない。江漢は天明八年長崎に遊んだが、西遊旅譚には唐通事と交つたことは見えるが、阿蘭陀通詞に関しては記す所がない。又大阪の山片蟠桃は文政年間、「夢の代」の著に、西洋の新説として地動説を時人に先だつて唱説したのであるが、其参考書中に本木の訳書があり、本木の訳書は長崎奉行より幕府に送られ、江戸の天文方に蔵められたと思われるが、是等の事実により、其中、長崎からか江戸からか多少の流布のあつたことが知られる。又三浦梅園が自ら地動説を考出し、麻田剛立に之を質したということ、帆足万里の窮理通の序の中にもあり、このことは当時然か伝えられていたようであるが、当時板行されていなかった梅園の諸著作を、今全集として刊行されたもので見れば、かの三語、帰山録等を綜合して、梅園が五十余歳、長崎に赴いて初めて耕牛及翠崖より地動の説を聞き、條理未だ考え得ずと記しているのを見る。通詞等は早くよりこれらの西洋の新説を聞いて居り、然かも所謂「憚りあり」として之を秘していた。本木初めて之を解説し、其論、或は江漢に伝わり、又蟠桃の知る所となつたとするが妥当のようである。長崎に於てはその伝統は志筑柳圃に伝わり、柳圃の学術的研究は師に尚一步を進めたといふべく、又耕牛の孫の吉雄南臯は尾張侯に仕え、泰西觀象図説等を著わし、地転の説の解説に蘭臯、柳圃の衣鉢を襲いだと思得る。

四 本木の父祖

良永の子庄左衛門正栄の暗厄利亜興学小筈、同語林大成の著述、並に曾孫昌造の活版印刷術の興始等はその事績の大なる、ここに附記するに余り、又既にそれらは屢々伝えられているが故に、ここには凡て省略して唯、本木初代の庄太夫のこと、並に良永は本木二代の長女に妻わされた養子で、法眼西松仙の次子であるから、その実家につ

いて伝わっている所を附記するに止める。本木の姓は初代の庄太夫栄久に始まり、其先は平戸の人で林氏を称し、代々松浦侯に仕えた。庄太夫に至つて寛文四年長崎奉行に召抱えられ、小通詞となり、同八年大通詞となり、阿蘭陀人へ差添九度江戸表へ出た。其中、天和二年二月廿八日御城に於て御礼すみたる後、阿蘭陀人へ差添罷出まかりいずる様命ぜられ、白書院御簾式間程近くに召寄せられ、老中列座にて、阿蘭陀人の名、年齢、並に阿蘭陀国の寒暖、衣服の次第、外科本道の義御尋ね、阿蘭陀人立姿御覧、たけの高さ御尋ねあり、其後阿蘭陀人謡舞徳松若様御覧遊ばさるべき旨仰せられしに、阿蘭陀人共おそれいりおこしわり恐入御断申上げた。

そこで、それ迄、一人にて通弁勤めいたる本木庄太夫罷出で阿蘭陀人の舞を仕り、謡いたるに、引続き阿蘭陀人も舞うに至つた。右の唱歌御尋ねあり、庄太夫早速和解わけつかまつ仕り差上たるに、御褒美のため御絞付の破魔弓を投げられた。之を頂戴し、巳の下刻御城を下る、と由緒書及長崎市役所蔵する古書牘とくに在る。此時かの乾坤弁説の和解者西吉兵衛玄甫も同行したという。以上は有名な蘭貢使江戸参礼の一例である。

良永の実父西松仙は長崎在住の御用医で、法眼に叙せられた。長崎郷土誌に拠るに、其長子道俊（即ち良永の実兄）は高山彦九郎と善く、何等か仔細ありて共に海に航して天草に渡り、其地で道俊が病を得て急に癒えなかつた。彦九郎再び筑後に渡り自刃して果てた（寛政五年）。時人何の故たるを知るものがない。道俊病癒えて後、又筑後に赴き、彦九郎の墓側で自刃す、年七十三という（日本人名字書にはこの自刃者を唐崎某としてある）。松仙の祖父は医として当时に聞え、法橋となつた。八十八歳のとき東山太上天皇の病を療し、功を以て法眼に進み、院号を賜わり、寿仙院と号した。享保十三年歿し、年百二十六という。其祖父宗貞医を以て加藤清正に仕え、寿百十三歳とある。

五 本木の仕事の効果

延享元年青木昆陽が長崎に赴いて、西、吉雄等からゾン（日）マーン（月）ステルレ（星）ヘーメル（天）アールド（地）等の所謂単一なる常語四百許りを覚えて江戸に帰り、其後二十五年にして前野良沢、昆陽について之等を学び、その六年後安永三年には解体新書刻成り、又その十三年後天明八年に磐水の蘭学階梯が出版された。此間長崎では安永元年以後本木の前記の諸訳があらわれていた。磐水の所記に「余（磐水）東帰（長崎より）の後、翁（耕牛）又江戸に蘭客に陪し来る、拙撰蘭学階梯を出し示せしに、翁撃節して嘆じて曰、吾儕世々訳司の職に在り、官より許多の厚き俸禄を拝賜し、且暮通弁訳語の事に与りて、未だ斯る訳著の事に及ばず、君等のために汗顔する所なりと賞したり、翁天性真率斯の如く、小事に拘らず宏量大度云々」（引用前出）。通詞の学修法は蘭学階梯下巻「修学」の條下に在るが、簡易のリーダーより始めて会話作文を主とすること記され、他方漢学に疎く、訳文に習わず、読書の力なきこと、蘭訳階梯等に縷説してある。蘭書研究の組織的なものは長崎よりは江戸に発達したが、然かも蘭文講読の正法が長崎の志筑柳圃に始まれること、磐水翁も繰返し述べてある。即ち柳圃の文典の研究をいうのである。安永六年柳圃は十八歳のとき通詞の役を退き爾来閉居して専心研究して期年の後遂にこの発見をなすに至った。本木の時代は少しく之に先だつていて、柳圃の為に荆棘を開いたと云える。当時通詞の社会的地位は相当のものであったが、併し封建時代に於て煩瑣なる規矩の下にありながら日常の業務より顛脱して「先進訳司の試みざる」訳文に志したことは固より非常なる努力を要し、又若干の耳学を以てしても或程度までは用の足りる金創瘡瘍の治術と異り、特に専門的知識を要する天文書の解説の如きに従事したのは、真に好学の人であり名利に超越した人でなくてはでき難い所であつたであろう。又前記の諸訳に於ては特に學術語の訳語の選定に苦心の甚大であつたことが窺われる。是は今日に於ても尚常に嘆ぜられている所で、横行文字を縦行文字に翻する最初の試みの時代に於て既に其苦しみを味わつたということは、又同情に値する。同様の苦心は解体新書の訳について、「蘭学事始」の中にも記されているが、ともかく、此場合には数人の同志の相依るものがあり、本木の場合には、時に蘭人に質

し得る便宜もあつたであろうが、又実に安永四五年にはツンベルクが出島に在館したが、天文学には門外漢で、本木の訳稿中にはサスセという蘭人に尋ねたことのみが記されてある。かような苦心の下にできた諸訳稿の効果については、今日に数え得るものは、「惑星」其他の若干の訳語又漢学に疎きため却て和語化した「広がり」「隔たり」等の訳語の類に止まるようであるが、当時に於ける影響を示すものは、既記の司馬江漢の記す所も其一例と見るべく、又他の一例は、遠藤氏日本数学史寛政元年の條に、長崎訳司の上りし永続曆和解を將軍家齊より小側役小笠原若狭守を経て新曆調所の吉田鞞負命ぜられて調査し、蘭曆の法は永久に用い得るも、永続曆は天度に合わずと答えたのである。あわれ本木の苦心の訳も其俛に葬られたであろうが、この曆は前にも記したように一種の近似表で、その不合の点も本木は説明してあつた。他の「平天儀」「日月圭」等に関するものは「永続曆」同様何れも官命又は依囑によりて訳したものであるが、其内容は皆幾分好事的であつて學術的でない。命令者依囑者の方に夫れだけの十分の用意がなかつたためであるが、前記の諸種の中では「地球図説」「天地二球用法」「太陽窮理了解説」の三種が、若し^も当時に於て尚一層其価値が認められて、之に基いて研究が進められたならばその効果も發揮せられたであろうが、江漢の諸著の如きは単に是等の一部分をポピュライズしたに過ぎず、幕府の秘庫に蔵^{おぼ}められたまま埋没したのは惜むべきことであつた。然し^{しか}乍^{なか}ら本木仁太夫の和解ということは、磐水翁の所記に見るも当時に相当に聞え、幕府も、医書には江戸に人多しとするも、天文地理書の和解には本木を唯一の頼みとした。本木歿後、地球図等の解説者は二三に止まらなかつたが、天文曆算には、志筑の曆象新書の翻訳、ランダの曆書の舶載が一時期をなし、やがて磐水翁の尽力も加わつて、文化八年幕府の天文台に蘭書和解御用の一局が設けられるに至つた。然^{しか}かも尚天保十一年には天文台に命あり、蛮書翻訳は曆書天文書及医書究理書の類、其職掌者の外は世上に流布せしめざること、且又和解御用掛の人々は、何書にても翻訳^{さしつかえ}差支これ無き様是又心掛くべきこと（磐水存響年譜）とあるなど、本木歿後五十年で、尚一面窮屈なるものあるを示すが、また他方に外国文明吸収に汲々たることも見え、是

等の組織が数転して、蕃書調所、洋書調所等を経て、今日の帝国大学の先をなした。其淵源、実に本木が天文書和解に命を奉じ得た当時、唯一の人であったことに遡り得るとすれば、本木の仕事も所謂縁の下の力持のようであったが、云わば大きな家の礎石を置いたものであった。

又既記のように、本木は安永元年の地理書に於て、既にコペルニクスの地動説について述べ、最後の寛政四年の和解に於て之を詳説し、それらが江漢蟠桃等によつて一般に流布した。和漢の学の外に蘭学という新しい領域の発見に驚ける当時の我国に、問題が根本的なるだけ一層、西洋の學術の測り知るべからざることを想像せしめた。一部分には、歐洲ルネッサンスの期に、コペルニクス自らが与えたと同様な思想の動揺もあつた。漢学者は容易にこの新説を受入れた様である。徳川初期の朱子学者は、或は林羅山は西説が地を球なりとするを、大地の下に天ありとするは憫むべしとし、又向井元升が有名な乾坤弁説に陰陽五行説を主張したのなどと異なるのは、既に支那伝来の天経或問等によりて旧西説を肯定し、西説に偏執の感が比較的少かつたためでもあろうが、それと同時に漢学に守株すべからざるを自覚した。唯だ仏家には尚お須彌山説を持出しなどして西説に反抗するものもあつた。釈円通の仏国曆象編の如きはその尤なるものであつた。歐洲の歴史に無頓着に、排耶蘇教が反地動説に導いたのもある。却て平田流の神道を地動説に合体せしめ、天の御中主神を宇宙の中心（然かく解して）の太陽に配した佐藤信淵の万物化育論の如きもあつた。是等は皆徳川末期に於ける思想動揺の根本的なるもの一つである。ゾン・マーン・ヘーメル・アールドの単語の研究が是等の結果を産むに至つたとすれば、本木の諸訳の我国文化史上に於ける位置も軽視する事はできないのである。

右文中司馬江漢の長崎旅行に関するは江漢著の画図西遊旅譚を基とせるものにて、版本としても尚お此書に別本ある如く、又本誌前号古賀氏の吉雄耕牛伝に依れば陸軍士官学校蔵西遊日記なるものありと云えば本文中右に関する余の所記は尚お不十分と思わる。茲に追加訂正する（この西遊日記は翻刻あり）。

(大正十五年十一月十二月、科学知識)

- 底本は『科学史考』(一九四四年七月、河出書房)である。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には`LATEX2 ϵ` でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://redshift.hp.infoseek.co.jp/scilib.html>

- 桑木或雄著『科学史考』（河出書房、昭和一九年）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi} \rightarrow \text{pdf} \rightarrow \text{m} \rightarrow \text{x}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。